



浄界 癖物語

豊竹古靴太夫

「上方」満十周年記念として「文樂號」を出すので何でも好いから書けと、南木先生からの御申附、さて何を申上げてよいやら共の話は一向面白くないと思ひますが以下難然と記すまゝ御赦しを願ひます。

私が東京から淨瑠璃の修行に下阪したのが明治廿二年六月、先代竹本津太夫の門下となり、同年十月興行から御靈文樂座へ出勤其時の出し物が前「鬼一法眼三略巻」切「神靈笑口渡」で、この番附の大序初筆に竹本津葉芽太夫と名付けてもらひ、勉強のスタートを切りました。其時の座頭は二代越路太夫後の攝津大権、以下午失禮尊稱を略させて頂きます。及び二代津太夫（後に七世綱太夫）。はら／＼の呂太夫。二代長尾太夫。初代路太夫。谷太夫（後に九世染太夫）。綾太夫。六代氏太夫。八代むら太夫。緑太夫壽太夫（元多門太夫）。さの太夫後に三世越路。文太夫（現今の津太夫。巴勢太夫。高尾太夫後に七世時太夫）。九重太夫。津和太夫。彌鳳太夫。楠枝太夫。この外に大序級に越戸。呂磨。品尾。津満。小松。綾の。津葉芽（私）。是等が太夫部で二十六名。

三味線部では五代松葉家廣助。二代叶。二代勝七。五代吉兵衛。三代勝鳳。四代勝右衛門（後に六世清七）。花助改勇造後に五代文

癖のさまぐ

以上の内から擧げて床の上の癖、語り方、弾き方の癖といった風の話を上上げますのも春の一興かと存じます。恐らくこの時代の事を御存じの方はソウ／＼そんな癖もあつた、そんな語り方もあつたと思ひ出されるでせう。

當時の紋下は越路太夫、又庵は津太夫（先代）でした。



竹本越路太夫 五代春太夫の門人、初名南部太夫後（萬延元年）に二代目越路太夫と改名、後年攝津大権となる

越路時代は随分と體を動し、延上り行義が悪かつたように思ひました。昔の語り方は膝の上へ御扇子を持つて少しも體を崩さずに語つた物ださうで、夫れが少しでも體を崩すと、アノ太夫は行儀が悪いと云はれたとのこと、其行儀を悪くしたしたのは越路太夫からであるといふことです。拍子扇も使ふ。又體も動かす、これが又大流行となつてきて、彼十八番中の中将姫雪責など語られますと、赦さず給へ母様といふ所などは、盛んに延上つて美聲を張上ると、御客様はうつゝに成つて拍子喝采。又先代萩御殿の政岡が、思ひがけなき御辛抱と申すところや忠臣藏九段目の殿は、や

物語

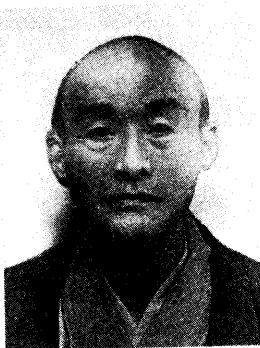
藏。小重後に重太郎（再改三代重造）。鶴太郎後に三代叶（再改三代清六）。三造改四代徳太郎（再改八世三三）。初三郎後に八兵衛（現今東京在住觀西翁）。富作。吉之助廣七。小叶（後に朝太郎）。團之助。仙太郎。安治郎。小庄（後に大造改猿糸再改現今六世友治郎）。廣吉。寛治郎。花勇。叶吉（太夫と成、現今の叶太夫）。重子。喜太郎。勝久。等の二十六名。

人形部では初代玉造。先代紋十郎。玉治。玉之助。榮造。玉七（二代玉助と成り後に二代玉造）。玉枝。玉龜。玉五郎。玉朝。榮壽。卯三郎（後に助太郎）。金之助（後に多爲藏）。幸三郎（後に二代玉治再改四代文三）。呂光。紋三郎。芳松。久吉（現今玉治郎）。政吉。紋光。玉壽。豊吉（玉六と成り現今二代玉七）等で二十二名。

以上三業合して當時の文樂座員は七十四名と外にはやし方の小川淺丸（現今のはやし方小川彌三郎の叔父に當る人）が私の十二歳の時人敷でしたが、さて現在残つてゐる人達と申せば、太夫では文太夫の津太夫、津葉芽の私、二人きり、三味線では和三郎の（觀西翁）に小庄の友治郎にその後太夫に轉じた叶吉の叶太夫の三人、人形では久吉の玉治郎と豊吉の玉七都合七名が明治二十二年十月興行の番附から見ても残つて居る連中でありませう。

み、御切腹や和山合戦市若初陣の四方八方と申様な所を語られる時にアノ童顔のふく／＼しい太い眉毛を、上下して息をつめて後の文句をいふ其息の強いこと、後年に春太夫と改名後は余り體も動かさず、其後大権となられてからは益々行儀よく語つて居られました。大正二年四月に引退せられ、同六年十月九日須磨別荘に於て死去されました。

行年八十二、春曉院殿越峰攝翁居士、俗名二見金助、墓所、天満東寺町寶珠院にあり



竹本津太夫 山城様の門人初名縁太夫。後（元治元年）二代津太夫と改名。後年七世綱太夫を襲名。通稱を法善寺といふ（註千日前法善寺内に住む故）

小音では有りましたが、中々の上手で、出ないやうな聲でゐてうまく抜けつくりつ語る方でした。天王寺村兵助内や鰻谷など語られると、随分御客様が泣かされたものです。それで時代物、日向島や鬼一の三、薄雪の三、何んでも語られ、そうかと思ふと、廿四孝狐火朝顔の宿屋、三勝酒屋と實にあらゆる物を語られました。此師のくせは尻當と申して太夫がお尻へ臺をいただきます。これを尻敷とも尻あてとも申して居ります。これを出したり入れたりを尻敷とも尻あてとも申して居ります。これを尻敷とも尻あてとも申して居ります。尤も尾籠な御話ですが、元來痔を病んで居られた

ましたので、この尻敷と他に皮で造つた鳥の毛を入れてある丸い蒲團よりの物と、取替へるので、夫れが忙しいのです。それに床本を左の指先でつかみ開けをする癖がありましたから本がしわくちゃになりました。又お扇子の要の所を縦に握つて見臺をげんこつで叩くので、是も見臺にきずがついてをりました。例の堀川猿廻しを語つてもエ、何んさらずぞい、と申所などは、一寸中腰となつて語つてをりましたが、體を延び上りなどは致しませんでした。二回病氣を致されて明治四十一年十一月に文樂座を引退。法善寺自宅にて養生。同四十五年七月廿三日歿されました。行年七十四。雲龍軒響津海居士、俗名櫻井源助、墓所四天王寺瑠璃殿裏に有、又京都には綾小路大宮西へ入法善寺々中櫻井家墓所にもあり



初代豊竹呂太夫 初代古靱太夫の門人、通稱はらく屋で通つておました。

も勿論、文樂の部屋でも膝を崩されたのを一度も見受けませんでした。それに昔から此方の様な大音強聲はなかつたと云はれ、實に名音でした。元祖義太夫の音聲は大きかつた相で、又二代政

天滿に古い薬商の旦那で實に立派な體格、まるで關取のやうでした。平生の行儀の善かつたこと、御宅で

大夫の聲は山伏がほらの貝の音と間違つたとか申す位、大聲であつて、竹本座から道頓堀川を渡つて宗右衛門町の通りまで聞へたといふことで、今、政大夫の聲が聞へた、サア晝飯に仕様と、丁度只今のサイレン代りにされたといふ逸話が残つてゐます、この呂太夫の音聲もほらの音とは申しませんが、政大夫の如く随分遠くまで響きましたことは現に私が聞いて知つて居ります。それは御靈文樂座のあつた御靈神社の表門御靈筋に出て、平野町の東北角に魚岩と申す魚屋がありました。爰の主人公も文樂ひいきで、初日にはきまつて床の下の所に二人詰の場を一人で取つて聴きに見へてゐましたから文樂の者は上廻りでも下廻りでも、この家へよく遊びに行つて、文樂の評判を聞いて参考とし話合つたものです。そんな譯で私も子供の時代から毎日のやうに參つて居りました。勿論當今のやうに町幅も廣くはなし、町通りも靜かでしたから、この店に居りますと呂大夫の大きな笑ひのところとか、大落しのところが本統によく聞へましたから昔の太夫方の聲も聞へたといふ話は實際だと感じました。それは現今のやうに電車、自動車、オートバイの往來する騒音時代とは違ひ、物靜かな人通りであつたからでもあります。呂太夫の癖は見臺と御自分の右の膝とを扇子で一度にトン／＼と叩かれるのが癖、又足袋を履かず素足で床へ出られました。床の態度は立派なものでした。毎年春先に田舎から上方見物に見へる方々は、きまつて文樂座へ来たもので、呂太夫の一ノ谷陣屋でも上演されてゐて、相模は障子押開きと、この一言を聞いて得心してゐたものです。

明治卅六年正月興行に病氣を發し、其儘引退し宅にて養生、

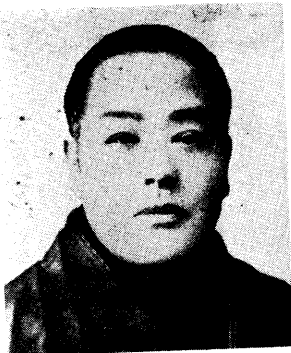
明治四十年三月三十日歿、行年六十四、釋慧聲、俗名上西吉兵衛、墓所、北區富田町常圓寺上西家、又四天王寺大師堂北側墓地にも墓あり



竹本長尾太夫 初代長尾太夫の門人、初名豊島太夫。後に師名を相續す。(師歿後二代越路太夫の門に入り文樂座々附となる)

長尾太夫は元來東京の太夫で、五人伎、布引瀧ノ三、龜山嘶八ツ橋村と申す様なものが十八番で、中々強い聲の方でした。此方の癖は何の段を語られても、泣く時には左の手に手拭を持つて、左の眼を押へ、右の眼は其の儘にして、ハアと泣き落す癖、東京の方故大變に、ナマリを氣にして、下廻りの子供らにまでナマツてはいなかつたか、サア今日はうどんをおごろう、氣を付けて知らして呉れると、こんな工合に頭を使ふてゐられました。此方の床本を見ますと、あげ下げの印で、それがよく判りました。御人は極く好い方でしたが、見た目には色が黒く強い人の様に思はれ。私は一度叱られて驚いたことが有りました。

明治廿六年十一月興行まで勤められしが同年十二月廿九日歿、金獅院猛踞眞性居士、俗名川名金治郎、墓所は下寺町遊行寺院内裏庭墓地にあり



竹本谷太夫 四代住太夫の門人、初名登勢太夫。後に谷太夫と改め住太夫歿後五代彌太夫門人となる。後年九代目染太夫を襲名す。

染太夫は二ノ音の冴へた強い音聲でしたが、口を曲げて語り、又大落しなどでは、見臺を左右の手で持ち、がた／＼と揺さぶる癖がありました。二段目物は何を語られてもよろしう御座いました。大正二年四月橋津大棧引退と俱に文樂座を引いて病氣養生後、行大正五年二月十七日歿、眞月院自高日照居士、俗名秋山瀧造、行年六十四、香川縣三豊郡杵田村字上出在家に墓所あり。



豊竹綾太夫 六代咲太夫の門人、初名小咲太夫、後に琴太夫と改名、其後太夫を廢め尼ヶ崎に退き、暫時休業、素人として語り、其頃尼ヶ崎の琴聲とて名高かつた。

明治廿年四月、文樂座興行の時、二代越路大夫の門に入り、豊竹綾大夫と名乗り、芦屋狐別れの段を附物に語つて出座しました。上品な淨るりで美聲と申す程ではなかつたが、何んでも語られ、妹背山掛合の雛鳥などは永い間の持役、それに吃の又平なども語るといふ人でした。此方の癖と申しては特に擧げられませんが、只眼を本にばかり落して少しも顔を正面に向けず、伏目がちに語つてゐられました。これも癖と申せば申されませう、至極温和な好人物でした。

明治三十一年六月興行まで出勤し、病氣となつて休座、同三十二年五月廿四日歿、行年五十二、釋宗後、俗名福田松藏、墓所は阿彌陀池和光寺境内にあり

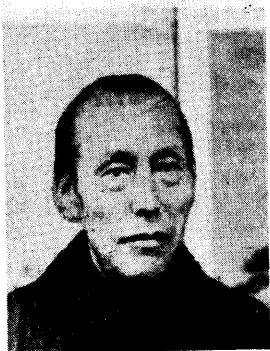


初代路大夫 二代越路大夫の門人、初め九太夫と稱し越路門下の高弟、後に路大夫と改む。

此方の淨瑠璃も中々上手で何んでも語られました。癖と申すのは我々が床へ上ります時に、懐入れと申す物(落し共いふ)を内ふところへ入れます、この懐入れの左右を手で持つて體をななめにし、首を右へ曲げ、唇を先へ突出して語るのが癖でして、此形は見るから憎らしいように見へました。

明治三十年三月興行まで出勤、病氣にて休座、同三十年八月十日歿、俗名佐々木龜治郎、行年七十九、龜響鶴峯信士、天満東寺町寶珠院内に墓あり

いて座つて居られました。樂屋ではいつも線香を薫へてその中に座つて居る癖がありました。師匠引退後は三代越路大夫の頭取をも勤めて居られ、大正三年三月興行限り役を辭し、文樂座の頭取となる。大正十年二月十日歿、俗名佐々木龜治郎、行年七十九、龜響鶴峯信士、天満東寺町寶珠院内に墓あり



五代豊澤廣助 三代廣助の門人、初名豊之助、後に富助再改二代猿糸、後師名五代廣助を襲名す、通稱松葉家

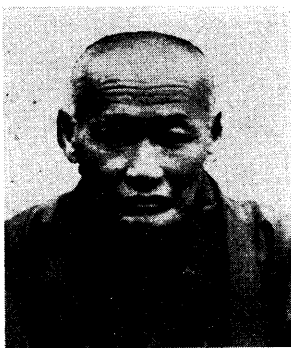
床の上の行儀の善いこと少しも構へを崩さず實に立派なものでした。此方に際

と申すものは見附からず。何んとなき位ひがあつて恐ろしいやうに思ふて居りました。越路大夫廣助で、先代秋柳殿を勤められ、はぐくみ返すと申して此間に合があつて、鳥羽玉のと語られます所やら、又忠臣藏七の掛合、おかるの逢ひたかつたで有らうのと申す、此二ツの間合には、毎日御客様が拍手の鳴らぬこととはなく實に何共いへぬ結構なことでしたが、これを他の人が弾いて同じ越路さんが語つても御客には何共反響のなかつたのは、語られることは同じでも弾く三味線の間拍子が違うので、ピンと御客様には來ないのであらうと樂屋内でも嘯をしてゐられました。未だにこの二ツの事は耳に残つて居ります。老年に及んで指に油がな

四日歿、俗名石川彦三郎、行年五十三、釋淨澤、墓所は天満東寺町寶珠院にあり

竹本氏大夫 五代目春大夫の門人、初名養老大夫。

此方も尼ヶ崎で名代の素人天狗で、俳名を養老と申され、其儘太夫名にして松島文樂座へ出勤され後に六代目氏大夫を襲名されました。師匠歿後二代越路の門下となり文樂の頭取を暫く勤めてゐられました。通稱をむきわらの蛇と仇名されましたのは、ひどい菊石面で、おまけに色が黒く、見るから強い顔でしたからです。この人の癖は聲が鼻へかゝるのが耳につきました。明治廿四年九月文樂座興行まで出勤、後は彦六座へ加入後浦太夫と改名して死去す、歿年、法名、行年、墓所不明



八代竹本むら大夫 五代春大夫の門に入り、初名を榮大夫と稱し後越路大夫の門人となり其後兄の前名を繼ぎ二代春榮大夫より再改八代むら大夫を襲名す。

此人の音聲は傍にゐると、耳が痛い位ひ甲高い聲で、停車驛迄來なければ止まらぬといふ特急性でした。語り口の癖は兩手で見臺を叩き其手を胸の上まで持つて來る。體の御行儀は佳かつた人です。いつも攝津さんの御傍で行儀よく首を下げ、お膝に手を置

いたので、よく右の親指へつばを着けてバチを持たれてました。こんなことが床の上での癖とでも申しませう。明治三十五年九月興行まで出勤、病氣にて休座後、同三十七年二月十八日歿、俗名栗原豊助、行年七十四、豐壽院德譽日廣信士、墓所は高津中寺町正法寺にあり、又四天王寺本坊北入西側にも墓碑あり、

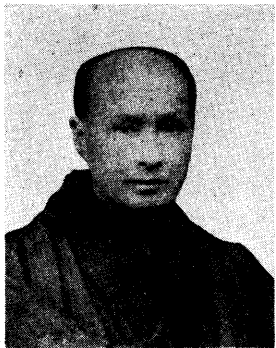


二代鶴澤叶 初代清八の門人、初名鶴太郎。後に清八の前名二代叶を襲名す。

此方は六世榮太夫の息子で却々の家柄でした。至つて穩かな方で、節附の名人

でした。すべて語る大夫の聲柄を呑込みその善惡に依つて節を附けるといふ風でした。存世中の文樂の樂屋は頗る賑やかなものでして、張切の相撲、又は書直し一字書、傘附や投扇興の競技をやつたりして樂屋の催事は毎日盛んで、これを樂みにして皆が早く部屋入をしました。此方の癖は調子を合はされる時、大事さうに一の糸をトンと音をされる時にはホウ／＼と息をさせる。又床の上では指先を糸へかけられて、ピチツと申すような音をよくさせられました。他の人がやつては變に聞へるのが此方のはそこに何共いへぬ妙味があつて面白いことだと思つて居りました。これが癖であり特色であつたと思ひ出します。

明治廿四年十月興行まで文樂に出勤、引退後明治廿五年十月五日歿、橋泉院潤齋叶峯居士、俗名橋新兵衛、行年五十七、下寺町遊行寺の裏庭墓地に石碑あり



二代鶴澤勝七 初代清六の門人、初名友太郎。後に初代玉助。再改二代勝七を襲名す

なつて出勤、實に美しい頭をして居られ子供心にも餘りピカ／＼光つて見事なので、一度訊ねて見たところ、これはわしの若い頃に頭をはがさねば値打がないといふて、軽石で／＼とこすり禿したものだと言はれました。癖と申せば、バチの眞中を持つて、ホウ／＼と掛聲をかける。それに此方ぐらひ役を仕舞ふたらず／＼家へ歸るのを急ぐ方はなかつたと思ひます。それでゐて弟子に片附けさせるでなく、御自分で三味線を拭いて仕舞うてさつさと歸へる。家へ歸つてどんな用事があるかといふと、何にもなく、火鉢を挟んでお上さんと差向ひ、お徳／＼と云ひながら鬚を毛抜でぬいてゐる、是が日常の癖でした。後年に此方の道行を弾かれた時に私もツレに出たことがあつて、其時に歸ることの競争を仕て見た事がありました。

明治三十年正月興行まで出勤されましたが、床の上にて病氣起り其儘引退、其後山口縣彦島へ引越し彼地に於て歿す、時に治



五代竹本彌太夫 三代長門太夫の門人、初名小熊太夫改長子太夫。再改五代彌太夫襲名、通稱堀江の木谷といふ

此方の聲は悪聲ではありましたが、矢聲の強い事は偉いものでした。私も青年の頃、飯碗や。八百屋。沼津。さかろ。岩井風呂などを聴かして頂きましたことが有りましたが、實に結構であつたことを只今も思ひ出します。床の癖は語つてゐられて左右の指で本の兩端をぐつと掴む、又その皺になつた箇所を平手でせつせと押しをするのが癖でした。明治十九年十一月文樂座興行限り引退せられ、數年後の明治廿七年三月より彦六座改名稻荷座へ紋下となつて出勤、同三十一年六月同座解散後再び引退され、同三十九年十月十三日歿、瑠璃院教傳彌弘居士、俗名木谷傳次郎、行年七十一、墓所は生玉寺町青蓮寺



三代竹本大隅太夫 五代春太夫の門人、初名春子太夫。後に三代大隅太夫を襲名す

此方は昔づかひの名人であつたと思ひます。忠臣藏九の、ハ、マ、ア、勿體ないこと

明三十三年十月四日、歸眞最勝信士、俗名久野友太郎、行年六十三、墓所は山口縣南風泊彦島にあり



四代鶴澤勝右衛門 五代清七の門人、初名勝作、後に綱造、故四代勝右衛門襲名後年再改名六代清七となる(現今の綱造の實父)

此家は淨瑠璃界で珍らしく四代續いて三味線を業としての家柄で初代綱造の件が二代を相續し、二代の息子が三代を繼ぎ、四代勝右衛門から六代清七となり、此人の件が當今の四代綱造となります。我々の社會で四代も續いて同業を営むのは、全くこの綱造の家より他にはないので、所でこの勝右衛門の癖は三味線を弾いてゐて鼻へ息を引くたびにイビキをかくように鳴らすことがありました。

明治三十二年六月興行まで文樂に居られましたが芝居を引退後清七と改名して東京へ出られて稽古を樂みにせられてゐたが、大正九年七月廿九日東京にて死去、釋道覺智圓信士、俗名前田鹿之助、行年六十九、墓所は北區我野町大融寺前運華寺

以上文樂座の方は他にも澤山ありますが、又の機會に譲りまして



おつしや、り、ま、す、わ、い、な、ア、と小浪の詞から泣落しの可愛らしかつたことや、又野崎村のお婆さんの詞の佳かつたこと、云ひ出したら限りが無いが實に耳にいろ／＼な事が残つております。扱自分が口へ出して見ると眞似事どころか一口も語れません。餘りこのお婆さんの詞が結構なので、是はあなたの特色の型で御座いますかと訊いてみたら、イヤ是は初代古軼さんの語つてゐたのを聞いて眞似をして語つてゐるとの御話でした。眞似もあれだけ語る事が出来れば可いなアと思ひました。扱この大隅太夫の癖は語つて居る間に人差指で顔を掻くのが癖で、それと手拭をわし掴みにして顔を拭く、しかし此方の顔を拭くも唾を吐くも湯を呑むも皆間になつてゐると思ひます。只だ顔を掻くことだけは間の以外。大正二年七月三十日、臺灣巡業中臺南病院に於て客死、行年六十、俗名井上重吉、宜暢院響齋流音居士、墓所は東區小橋寺町寶樹寺



六代竹本組太夫 五代春太夫の門人、死去後は二代越路太夫の門に入る。京都の人、素人名を玉吾とて名聲あり

明治六四年五月に道頓堀若太夫(現在の朝日座と辨天座の中間にあつた)芝居へ始めて出座なし、伊勢音頭油屋の段を五代廣助

の三味線にて六代組太夫を襲名し出勤す、是が太夫になつた始りでした。音聲は可いとは云へぬ悪聲の方でしたが、中々腹の強い方で、後年に大隅太夫、組太夫と一緒に彦六座の櫓下となられました。此方の安達の三を聴いてびつくり致したことがあります。後には駒太夫風の物も語られたことがありますが、修行さへ積めば聲が悪からうが何んでも語れるものと見へます。此方はよく引字されたので、癖は引字がくせかと思ふておりましたところ、古い評判記を見ましたら組太夫の引字と申す事が書いてありましたので、代々組太夫になる方は引字する、それが組太夫風とでもなつてゐたらしいのです、これは個人の癖でなくて組太夫風とでも申すのかも知れません。彦六座解散後、明樂座へも出座して居られました、後は東京へ引越され各席を廻つて居られたが急病にて明治三十八年七月廿五日死去されました。

俗名片岡藤七、行年五十九、釋明善、墓所は東京本所回向院内にあり、大阪墓所は四天王寺鐘樓堂裏にある。



五代竹本越太夫 四代越太夫の門人、始め三代難太夫となり、後に師匠歿後四代住太夫の門に入つて五代越太夫を襲名、後年五代住太夫を相續す。

此方も聲はなかつたが上手な語り振りでした。世話物でも時代物でも語り、後には先代萩御殿も語られました。此方の曰くには

人の進行く時代には語れといふものは何でも語つて置かねば可ないと絶へず云つて居られました。どちらかと申せば此人は世話物の方が自分の得手であつたように見受けました。それで癖の方は見臺の天板の前つらを右の手に持つて左の手を自分の左の腰に當て、體を斜にして語るのが癖でした。

明治四十二年九月廿二日歿、俗名吉野卯之助、釋誓現、行年六十三、墓所は四天王寺北墓に入る正面にあり



四代竹本住太夫 六代内匠太夫の門、初名田喜太夫、後年(萬延六年)に四代住太夫と改名。

此方は紀州田邊の産、幼少の時三味線にて阪地へ修行に出て、後に太夫となりました。師匠歿後三代長門太夫の門人となつて、盲人なれども中々の上手でした。文樂座に永年出勤され、後に彦六座へ轉じ、櫓下となられました。此方が床のぶん廻しでくるりと客席へ出られて挨拶の口上をいひ出す迄にニタツと笑ひ顔をしられた相で、是が大變に愛敬になつたと申します。

明治廿二年一月廿二日歿、俗名竹中喜代松、行年六十一、研眞院禪住明善居士、墓所は紀州田邊町會津橋西詰西方寺山門入りて左側にあり

初代豊竹柳適太夫

灘の酒造家、素人時代柳適と併名す。

素人淨瑠璃の柳適が太夫となつて、始は山城椽の門に入り、五代豊竹巴太夫と名乗つて出座しましたが、暫くして廢元の素人となり、後年彦六座へ再び柳適太夫と改名して出座しました。十八番は日向島であつたと申します。何様語を能く勉強された方で實に立派な音聲であつたといふ事です。この人の床の癖は爰といふところの前になると、兩方の耳たぶを指先でひつぱると、どんな聲でも出て來たといふ事です。至つて舞臺上の行儀は、少しも體を崩さぬ立派なものでしたが、この耳を引張るのが一つの癖でした。モウ一つは部屋入をもち、御宅を右の足で門を出たら彦六座の樂屋の入口を左の足で股がねば又少し跡戻りをして左の足になるまでやり直さねば氣がすまぬといふ神經質の癖があつたのと事です。

明治二十二年十月十四日歿、俗名高枝康平、行年六十六、釋教

圓



二代豊澤圓平 通稱清水町三代廣助の門人、初名力松後己之助。再收二代廣助の先名圓平を襲名す。

此方の事は皆様もよく御存じの通り若年の頃からで、十八歳の時、既に三代目豊竹巴太夫を弾き、合邦ヶ辻下の巻を三味線豊澤團平と太夫附に書してある位ひ(番附所藏す)之を見ても凡人ではありません。此方の床の上の癖は、サア之から注進が來る時とか、合邦で玉手はスラツと立上りと申す様な前になると。體を一トゆり後へ下るような形で一ト振りふる。サア是があつた後の其の三味線の強い程、どれだけ弾けることかと思ひました。それに九段目とか合邦とか弾かれる時には撥を二丁より床へ持つて行かずして、帯屋とか又他の世話物を弾く時には二丁も三丁も撥を持つて上ることを巡業に廻つた節に見て居りましたが、之れはどういふ譯であつたか、其節に何つて置いたら、何か参考になつたことかとも惜しく思ふて居ります。

明治三十一年四月一日彦六座興行の時、花上野譽石碑志渡寺を彈て居られて床の上にて病發、宅へ歸る途中にて死去されました。俗名加古仁兵衛、行年七十二、大達絲道居士、墓所は阿倍野墓地、又は高野山奥之院にもあり

(完)

